

東京歌会（第四十九回）

平成二十八年十一月十七日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二首十四首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

野の川に名のある橋や赤刈橋渡る人日に両手で足るか

小野澤繁雄

名のある橋や、は名があるだけで驚きという小橋。結句、両手で足るか、がすぐには解らない。十人に足りないだろうか。日に渡る人、としたらいいなど下句は動くかもしれない。

荷解きをする店先にデンファールの一束買って色を楽しむ

市川茂子

にとき、でなく、にほどきと読みたい。表記も、荷ほどき、でいいと。デンファールの名称がいい。今はいろいろある。一、二句の具体。色を楽しむ、よくわかる。

病名は違えど君はたゆたゆと歩みゆくなり別れきしなり

大石久美

ちがえど、でなく、たがえどと読む。作者も歩行に障りがあるが、病名は同じでないという

ところ。君との間柄にはある親和があつて、残るものがあるのだ。

くちびるを真っ黒にして食べるは娘が手造りの烏賊墨パスタ

林 博子

娘は、こ、と読むか。上句、くちびるを真っ黒にして、の直接性。烏賊墨パスタはしられているが、どこか新しく、娘の世代のものかもしれない。こういう関係もある。

小学校の修学旅行の湯野浜に砂を踏みたり五十年経て

布宮慈子

前の歌から、湯野浜は同じ庄内（山形県）にあるようだ。文字通りには温泉のある浜辺。三、四句の、湯野浜に砂を踏みたり、がいい。五十年経て、懐かしさにも時間数がある。

松傾く小田原城址あにいと本借りにいくいま郷土文化館

中川禮子

小田原城址、に図書館（室）のような社会施設ができていて、そこに小さな兄妹が本を借りにいった。そこが、いまは郷土文化館になっている。三句、兄さんと、でもよいところ、もう遠い世のこのように、あにいと、という一つの絵をみせている。

蕪蒸の蓋をとり上げ湯気と香に幼ごころのかへるたまゆら

河村郁子

かぶらむし。湯気と香に、と丁寧云っているところ、工夫のある歌と。ごちそうだったか。

東京歌会（第五十回）

十二月十五日（木）、会場：文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各一首十三首。出席者五名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子）。

暮れ残る冬空に浮く三ヶ月の上にまたたく宵の明星

市川茂子

風が止むと空が澄み切ってみえてくるものがある。季節と時間帯もある。三ヶ月は余りみない表記。月も金星もうごいているが、その位置関係がある。

白内障の手術を受けし年齢に一〇八歳ありしと眼科案内は

小野澤繁雄

作者は眼科を受診したのか？ 報告するような手つきの歌だが、高齢者の手術について少し意見を交換することになった。一〇八歳には今の時代もある。

緩やかに冬に入りゆく密けさや癒えなん人の背中のまるみ

林 博子

癒えようとしている人、まだ癒えていない人。声高なやりとりも少ないところ。病みあがりの方はそう察知されてしまうところがある。親密な空気感がある。

乗りかへてバス降るるとき運転士とことば交せば教へ子なりき

中川禮子

乗りかへて、がやや曖昧。乗りかへし、か。あとはよくわかる。教師時代があった。今も地元に住むのか。何か、ことばを交わすことをした。よかった、うれしい。

箱車押して歩めるわが前に猫いて犬いてわが足つづく

大石久美

箱車は手押し車のこと、楽だという。足に不自由をかかえている。猫も犬も歩道にいて、そういう人を注視してもいるようだ。置かれている情況がわかる。

白鳥の数おほければ庄内の人はすなはち五月蠅いと言ふ

布宮慈子

一首目の歌「内陸の人はしみじみ聞きをらむカウカウと来る白鳥の声」とセットで読みたい。内陸の人、しみじみ、と、この歌の、庄内の人、五月蠅い、はことごと対比的で面白い。手練れの歌と。一、二首目と、この順に読みたい。

花首を挽ぎて青年が配りくる葬祭場の昼の寂けさ

大石久美

間違つて二セット送られてきた歌の一つ。花首を挽ぎて、のリアル、青年が配りくる、さまの無感情さ、など。

東京歌会（第五十一回）

平成二十九年一月十九日（木）、会場・文京シビックセンター三階A会議室。詠草は各二百十首。出席者六名（市川茂子、大石久美、小野澤繁雄、林博子、松井淑子、丸山弘子）。

自転車隊のようなる音にきているは宅配便の女性ひとらこれから配達か

小野澤繁雄

風景として現在。必要な材料としては、自転車隊、宅配便の女性ら、を残したらいい。破調で、整理のしかたに難がある、と。団地などでは、敷地近くで仕分のような作業がなされ、あとは自転車に小振りなりヤカーを付けたもので小分けに配達している姿をみる。

尾長鶏の刺しゅうの額を取り出だし年改まる部屋に飾りぬ

市川茂子

酉年の正月準備。さりげないが、心の動きが感じられる。額装しておいたものか。年改まる部屋と尾長鶏で、酉年の新年が示唆される。

グループホームに入りて安定し居るとふ家族の便りにこころ安らぐ

丸山弘子

グループホームは現在だが、共同生活をするらしい、など意見の交換があった。ホームに入つた本人の（同居はしていなかったか）家族からの便り、なのだ。その以前の状態より安心できそうな環境がえられたということ。よく伝えている。

ベランダの野菜ひと夜に凍りつき捨てたる古い毛布を思ふ

布宮慈子

泥がついているようなものを取りあえずベランダに出しておくようなことはある。この野菜は二首目の大根か。雪国には屋外に保存するようなやり方もあるようだが。下句の（もつてゆきかた）意外性、が好評だ。

今朝よりは母なきイヴと鳴くならずや厨に小さき雀入り来る

中川禮子

母なきイヴ、つまりは娘、永久に母をうしなつた子。小雀が、在りし日の母の所在の厨に鳴いて入ってくる。じぶんも今朝からは母がいらない、と鳴くことになるのか。痛切。英訳もある。

（小野澤繁雄）